教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　小　森　一　則
編　集　広　報　部

もくじ

◎巻頭言 …… 1
◎関ブロ東京大会報告 …… 2
◎第52回県研究大会 …… 3
◎第52回県研究大会分科会報告 …… 4～17
◎特色ある学校 …… 18
◎地区だより …… 19
◎ひろば・編集後記 …… 20

巻頭言

リンク栃木ブレックス運営会社の人材育成について

株式会社リンクスポーツエンターテインメント
代表取締役社長　鎌　田　眞　吾

昨今、報道などであるように、日本のバスケットボール界は企業チームの廃部やプロチームの経営悪化、また日本におけるプロバスケットボールリーグのあり方などをＦＩＢＡ（国際バスケットボール連盟）から制裁を受け、日本代表の国際大会出場停止という、非常に厳しい現実を突きつけられております。日本のバスケット競技者、ファンの為にも今後は制裁解除に向け、バスケット関係者は様々なことを議論し、活動していかなくてはなりません。そんな中、私たち「リンク栃木ブレックス」は栃木県民の方々に支えられ、「ファン第一」、「健全経営」、「地域密着」、「強く愛されるモチベーションあふれるチームづくり」を会社方針とし、今回の問題に当事者意識をしっかりと持ち、これらの方針を追及し続けることが、日本のバスケットボール界を良い方向に影響を与えることが出来ると思います。

これらの方針をチームとして追及する為には、チーム運営会社（フロント）で働く人材力、会社組織のバランスが重要だと考えます。

チームの運営側（フロントスタッフ）は表舞台に出ることは少ないですが、フロントスタッフがいることでチーム、選手、試合の価値、ブランド向上は勿論、試合運営、スポンサー、チケット営業、スクール運営や経理、総務管理などの会社機能が回っています。私たちは形のある商品を売っているのではありませんので、チーム、選手、試合の価値やイメージを商品とし、分かりやすくお客様へ伝えなくてはなりません。

リンク栃木ブレックスのフロントスタッフの人数は全国のプロバスケットボールチームを運営する会社の中でもトップクラスです。私は、スタッフの人数が多い＝人件費がかさむ。ではなく、スタッフの人数が多い＝より大きな価値を生み、売上が上がる。という考えを持っています。しかし人数が多いだけではなく、この会社での各役割をしっかりと担える適切な人材が必要です。その上で各担当をバランスのとれた配置にして、組織力の最大化を図り、きめ細やかで斬新なサービスを常にお客様へ提供出来るように各担当から色々なアイデアや提案を出してもらいます。私たちの会社として、この提案はチームのブランドに相応しいのか、費用対効果は期待を出来るのかを採用を適正に判断し、対価に変えていきます。私たちの会社ではこのようにスタッフの提案を多く採用することで、スタッフの現場でのリーダーシップ、責任感や自覚が養われ、働くことに楽しさを感じることが出来る環境つくりが必要ではないかと思います。

社長や管理職だけがリーダーシップをとるのではなく、人材力を最適な組織バランスにすることで、スタッフが常に考え、仕事に対する責任感や自覚を持つことで、一つ一つの役割の中でひとりひとりがリーダーになっていくことが新しい事を生み出し続け、会社の、健全経営、繁栄につながるのではないかと考えています。

関ブロ東京大会報告

第55回関ブロ東京大会全体会に参加して

宇都宮市立晃陽中学校　廣　瀬　英　男

第55回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会が、11月13日㈭・14日㈮の２日間、墨田区・千代田区・新宿区・台東区を中心に開催されました。

開会行事では、東京大会実行委員長の開会の言葉から始まり、主催者あいさつ、来賓祝辞に続いて、研究部長から基調提案がありました。提案の中で、サブテーマを「未来に向かっていくたくましい力を育てる学校づくり」とし、研究の「継続性」、組織研究としての「協働性」、学校運営における教頭の「関与性」を３本の柱に据え、「生き抜く力」「絆づくり」を常に念頭に置き、教育活動を展開していくことが大切であるという考え方が示されました。

アトラクションでは、新日本フィルハーモニー交響楽団の生演奏があり、迫力ある演奏に心から感動いたしました。演奏の中の説明ではこういった演奏会に小中学生も参加しているとのことでした。「北野大の教育論」と題した記念講演では、淑徳大学人文学部表現学科教授北野大氏のお話を拝聴いたしました。お話の中ではタレントである弟の七光りで皆さんに名前を知っていただいたことなどをユーモアたっぷりに話されました。皆さんご存じのとおり、弟さんはタレントであり映画監督のビートたけし（本名北野武）さんです。

また、皇太子殿下が朗読して話題になったドロシー・ロー・ノルト著書「子どもが育つ魔法の言葉」の中の「子は親の鏡」という詩を朗読して、その内容のすばらしさを紹介してくださいました。さらに、日本には天然資源は少ないが人材資源は豊富にあるので、ぜひ人材を育ててほしいということを強調しておられました。その中で、「褒めて育てること、どんな経験も無駄な経験はない、謙虚な人間になれ！！」など楽しく、また熱く語られ、感銘を受けました。たいへん心に残る記念講演でした。

関ブロ研究大会東京大会提言発表を終えて

真岡市立真岡西小学校　大　木　　孝

第２Ａ分科会において「子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方」をテーマとして、栃木県を代表して芳賀郡市小中教頭会が提言発表させていただきました。

本年度は、３年間の継続研究の１年目にあたります。郡内の全教頭を対象にアンケート調査を実施し、異校種間の連携における課題を明らかにしました。そして、目標を共有すること、発達課題を明確にすること、問題意識を共有すること、情報の共有のシステム作りをすることの４つの解決策を考え、それぞれの解決策への望ましい教頭の関わりを柱に発表いたしました。

発表の後には、発達課題についての質疑があったり、県教委作成資料の「とちぎの子どもたちへの教え」を持ち帰って活用したいという感想が出されたりと、他都県の関心の高さが伺えました。

関ブロ研究大会東京大会提言を終えて

足利市立第二中学校　室　岡　芳　彦

11月13日・14日、東京大会で「教職員の資質向上を目指して－学校の組織力を高めるミドルリーダーの育成－」について足利市教頭会の提言をさせていただきました。

今まで足利市教頭会がテーマとして扱ってきたミドルリーダー育成の視点『教頭としての４関与』を継続・発展させ、実践例を示しながら説明致しました。他県でも若手教員の育成は喫緊の課題であることを参加者全員で共有しました。発表の中に『指導教員』、主に退職校長が３年目までの若手指導をフォローする、という提言がありました。また、ＯＪＴ推進の方策を模索している提言もありました。参考になる多くの提言に出会えた実り多い大会でした。

第 52 回 県 研 究 大 会

リーダーとはどうあるべきか

元株式会社東レ経営研究所社長　佐々木　常夫 氏

冒頭、ご自身のプロフィールについて話した。秋田市で生まれ、6歳で父親を亡くし4人兄弟の次男として母の手ひとつで育ったことや、うつ病の奥様のこと、自閉症の長男のことなど3人の子どものことについて述べた。

始めに、「タイムマネジメントは全ての基本」であるという話をした。タイムマネジメントとは、時間の管理ではなく仕事の管理である。優先順位をつけることと時間配分を決めることなど、仕事に対する価値観と段取りが大切である。また、組織の成果を出すことと部下の成長を見いだすことが大切であり、それがワーク・ライフ・バランス（個人も組織も共に伸びる）である。ビジネスは予想のゲームであり、先手・先手で仕事をし、定時で帰れるように仕事を組み立てることの大切さを話し「良い習慣は才能を超える」と述べた。

次に、「偏見を含めてのアドバイス」の話をした。「志」があればいくつになっても取締役になっても伸びる人がいること。読書の価値は本の数ではない、本を選びそれを自分の行動にすることが大切であることなどを述べた。

さらに、「ワーク・ライフ・バランスを実現する仕事術」についての話では、優れたものをまねること。優れたものをまねているうちに、優れたイノベーションが出てくることや、働き方・生き方には決意と覚悟がいること。トップの意識と行動が会社を変えるなどを述べた。

最後に、「学校教育について感じること」について話した。学校とは「良い習慣」を身につけさせる場である。子どもたちが、自分で考えること、その考えや意見を伝えることを習慣化させる。教育の目標は、生徒の自立への貢献であり、社会に貢献できる大人を作ることである。「校長・教頭の役割は、学校の中で最も大事な授業という業務に集中させることである」とまとめた。

（文責：宇都宮市立横川中学校　岩渕　　徹）

研究大会に参加して（駐車場係）

宇都宮市立海道小学校　小　池　雄　一

朝7時40分、駐車場係の打合せを済ませ、県内各地から参加する約540名の会員の皆様をスムーズに誘導できるよう、5名で対応しました。今年度は、昨年度と違い大谷街道の道路拡張に伴い、駐車スペースが縮小された中での大会でしたので、事務局とともに不安をかかえながらの仕事でした。教育会館出入口は、歩道・自転車道が整備されたこともあり、自転車で登校する高校生に特に注意を払いました。また予想していた通り本会館駐車場だけでは参会者の車が納まりきれず、護国会館・アグリプラザへの誘導もありましたが、参加された会員の皆様のご協力のおかげで大きな問題もなく係の仕事を終了することができました。ありがとうございました。

研究大会に参加して（運営責任者として）

真岡市立中村東小学校　北　井　　清

第2A・第2B分科会を担当しました。今年度はG協議の発表にA案（3～5G発表）、B案（全G発表）併記でどちらにするか悩みましたが、11月6日の司会者との事前打ち合わせでA案をとることとしました。

今年度県教頭会幹事になり、初めて運営に関わりましたが、熊倉研究部長や事務局の計画が緻密で、それに沿って安心して進めることができました。

また、提言者の提案はどちらもすばらしく、熱心な協議ができました。また、指導助言の先生、司会、記録、会場係の先生方にはたいへんお世話になり感謝申し上げます。

研究大会分科会報告　豊かな人間性と創造性を育む学校教育

第１Ａ・Ｂ分科会　教育課程に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　清水久美子　先生

地域連携の推進と教頭のかかわり
－地域と小中学校の連携の在り方－

提言地区　佐野地区　小中学校教頭会

小学校や地域のつながりを生かした教育課程の工夫
－教頭の関わりについて－

提言地区　宇河地区　中学校副校長・教頭会

１　提言趣旨

⑴　佐野地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

本年度より、県教育委員会では、各学校に「地域連携教員」を配置した。そこで本年度は、地域連携教員と教頭の役割を明確にし、各校での取組の見直し改善を図ることで、学校・家庭・地域の連携した取組が充実すると考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

各学校での現状を知るために、小中学校の教頭を対象にアンケートを実施した。また地域連携に関する知識・技術等の研修のため講話を聞いた。それらを通し、地域連携教員と教頭の役割の明確化の重要性を再認識することになった。教頭が全体の方向性・ビジョンを示し、地域連携教員が校内の組織体制づくりなどを行った。

ウ　成果と今後の課題

- 各学校で地域の実態を考慮し、地域の教育力を積極的に活用し、活性化を図るなどしている。
- ボランティアコーディーネーターを通し、ボランティアの人数が確保され効果的に教育活動が展開されるなどしている。
- 地域連携教員を校務分掌に位置付けるだけでなく、職務内容や役割を明確にする必要がある。
- 詳細な連絡や調整、事後の反省をするなどの時間を確保する必要がある。
- ボランティアの組織を確立し、学校との連携体制を整える必要がある。

⑵　宇河地区中学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

国、県、市においては、地域とのつながりを重視した施策等を展開しており、今後も、学校が家庭や地域と連携を深めていくことが期待されている。中学校では、生徒の主体的・自主的な活動を推進しているものの、地域との連携が十分でなかったり、地域連携における教頭の関わり方が明確でなかったりする現状があることから上の主題及びサブテーマを設定した。

イ　研究の概要

学校と地域社会との連携に焦点を当てた実践事例を４つの類型（美化活動、ボランティア活動、交流活動、地域人材の活用）に整理し、現状を把握するとともに教頭の関わり方を考察した。

ウ　成果と今後の課題

- 特色ある学校づくりが推進された。
- 地域協議会等を通して、地域が学校を支援する動きを醸成することができた。
- 教頭が連絡調整の役割を果たすことで、地域関係者との関係が深まり、教育活動が充実した。
- 教頭がコーディネートして地域と連携した活動の検討・改善を図っていくことにより、活動の充実が図れた。
- 小学校との関係を視野に入れた地域連携の在り方を検討していく必要がある。
- 地域と連携した活動の改善を図るため、学校と地域双方の適切な評価を行う必要がある。
- 教頭と地域連携教員との役割分担等を明確にするとともに活動の精選が必要である。

２　グループ協議内容

⑴　〔い〕班

○地域連携のための校内体制づくり

・校務分掌に位置付けることはもとより、校内で業務分担を明確に分ける必要がある。
・地域連携教員の活動を明確化し、地域のニーズを踏まえることが大切である。

○教育課程の在り方

・地域と連携する活動を行えばよいというわけではなく、活動が教育目標を達成する手段として教育課程に適切に位置付けられていることが大切である。
・地域と連携した活動として実施できることは多様にあるが、教育目標に基づき本当に必要なのかどうか、活動を精選するかじ取りをすることが教頭の重要な役割となる。

⑵　〔お〕班

○教頭としての地域連携推進のポイント

・教頭と地域連携教員２名だけでなく、校務分掌の中に（仮称）「地域連携推進部」を位置付け組織的に取組を推進することが効果的ではないか。ただし、小規模の学校は教員数が少なく位置付けが困難であると思われる。
・地域との連携は積極的に推進することが望ましいが、前提として、学校がしっかりと計画を立て、年度ごと・活動ごとの目標を明確にすることが大切である。
・地域コーディネーターと学校との連携を強化することが重要であり、そのためには、両者のしっかりとした話合いが大切である。

⑶　〔き〕班

○地域連携担当教員の位置付け

・学校では、地域連携教員、生涯学習担当、教頭の３つの立場の役割分担が不明確ある。
学校全体で取り組む場合は教頭、学年又は学級で取り組む場合は地域連携教員が担当している学校があり、分担例として参考になる。
また、生涯学習担当を地域連携教員に置き換えている学校がある。

○地域連携の効果

・宇都宮市が展開する「魅力ある学校づくり地域協議会」の取組を続けたことにより、開かれた学校をつくるよい契機になったことや地域住民の意識を変えたこと等の効果が確認された。
・同市の「小中一貫教育」は、小・中学校の保護者の意識の違いを埋める契機になっている。

３　指導助言

⑴　佐野地区・宇河地区の提言について

・両地区の提言とも、教頭の関わりを重視して資料をまとめた点が大変参考になった。
・佐野地区の提言は、マネジメントサイクルに「Ｒ」（リサーチを）加え「ＲＰＤＣＡ」で学校経営を推進した取組を紹介しており、アンケートを実施し現状分析を重視していることが特筆すべき点である。
・宇河地区の提言は、各学校の取組を具体的に紹介していることに加え、それらの取組に教頭がどのように関わっているか明記されている点が参考になる。教頭や地域連携教員の地域への関わりを考える際の有効な資料となる。

⑵　地域連携を推進するために

教頭と地域連携教員の役割分担例として、外部団体との連絡調整や予算関係業務は教頭、校内研修やボランティアとの調整等は地域連携教員が担当することが考えられる。

また、教頭の役割として、地域などからの評価を教職員に伝え、連携した活動のかじ取りをすることが大切である。

さらに、地域で生活している子供をみると、現状や発達の段階に応じた活動が想定されてくる。その際、小中学校を一貫した視点でみていくとよい。

なお、災害時の学校の対応など、学校だけが抱え込むのではなく地域の方々と共に考えたほうがよい内容があり、それらを糸口に地域連携を推進する方法もある。

⑶　地域連携を行う上での配慮

・本来、ＰＴＡ活動として行うことを地域連携と称して実施していないか、注意する。
・子供の家庭環境などの個人情報、地域の方々の個人情報の取り扱いに十分注意する。
　特に、校舎内に保護者の方等が入る場合、全教職員に周知を図るとともに、職員室などでの発言や行動に十分に留意することが大切である。

（記録：高島　典子・口川　和伸）

第１　分科会　教育目標・教育理念に関する課題（合同）
第３(2)分科会　教育行財政に関する課題（合同）

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　村石紀代美　先生

教育目標の具現化を図るための教頭の関わり
－保護者や地域との連携を踏まえて－

提言地区　下都賀地区Ｃブロック小学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　下都賀地区
　　Ｃブロック小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校教育目標の具現化を図るためには、教職員だけではなく、保護者や地域の理解を得、連携して取り組むことが不可欠である。

そこで、教頭として教職員・保護者や地域との効果的な連携を図りながら教育目標の具現化に向けてどう関与していくべきかを追究するために本主題を設定した。

イ　研究の概要

３ヶ年の１年目である今年度は、学校教育目標を具現化する上で、①教職員・保護者・地域の教育目標の理解と意識、②学校・保護者や地域との連携、③地域連携教員、④評価について、教頭としてどう関与しているか、どう関与していけば効果的に教育目標の具現化が図れるかについて現状把握と課題探求のためのアンケートを実施し、研究主題に迫ることとした。

ウ　成果と今後の課題

学校教育目標の具現化に視点を当てた研究を進めたことにより、広く教育活動を見直し、各校の教頭としての取組を明らかにすることができた。また、アンケート調査の結果を元に話し合ったことにより、教頭自身の悩みや課題を理解することができた。

今後、教育目標を具現化するために保護者・地域との目的意識の共有、組織的・効率的な体制づくり、効果的な実践、次に生かす評価など課題は多いが、更に研究を重ね改善を図っていきたい。

学校の教育環境整備における教頭の役割
－人的環境整備の工夫－

提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長会

⑵　宇都宮・上三川地区
　　小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

教育行政を考えるとき、学校の教育環境を整えることは、学校が取り組む中でも重要な内容である。

そこで、限られた人員、予算を活用し、教育環境の整備をしていくうえでの教頭としての役割を明確にし、工夫と改善を図ることが学校力の強化につながると考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

サブテーマに沿って、「教師力の向上による人的環境整備」「学校の特色を生かした人的環境整備」「外部人材を活用した人的環境整備」の３つの視点から実践事例を取り上げ、「工夫や改善策」、「教頭のかかわりのポイント」について分析し、教頭の役割として、限られた人的環境を最大限に活かすための助言や調整が大切であることを明らかにした。

ウ　成果と今後の課題

授業研究会の活性化やミドルリーダーの育成、校内特別支援体制の充実により、教職員のやる気を引き出したり、配慮が必要な児童を抱える担任の思いを学校全体で共有したりすることができた。また、地域協議会の活用などを通して、外部人材の活用も図られるようになった。

今後、教職員の育成と意識改革を図るための粘り強い働きかけ、地域連携教員の活用のために校内の組織体制づくりや全体計画の作成等を進めていくことが必要である。

２　グループ協議内容

⑴　［あ］班

○提言発表Ⅰについて

・学校からの一方的な情報発信だけではなく、各団体・公民館等の施設とタイアップするなど地域を巻き込み、保護者・地域の人が参加できる学校行事を実践したり、逆に地域の行事に参加したりしていく中で周知を図る。

○提言発表Ⅱについて

・インクルーシブ教育が叫ばれ、様々な課題をもつ子どもが在学し、非常勤講師が多くなる中でその任用や指導など教育委員会とのやりとりを含め教頭としての役割が大きくなった。課題を明確に適切な校務分掌を工夫するなど和をもって取り組む雰囲気づくりが大切になっている。

・共同研究をするなど、校内研修や研究授業を工夫して若手教員を育てる必要がある。

⑵　［か］班

○提言発表Ⅰについて

・学校教育目標は各校大きな違いはないが、具体策・努力点・重点化・構想などに具現化していくことが重要である。

・地域連携教員制度を生かすために、教頭は地域コーディネーターをはじめ、普段から地域とのつながりを深め、学校教育においての基盤づくり・体制づくりに努めていくことが大切である。

○提言発表Ⅱについて

・管理職がお互いにフォローし合い、教職員の性格や時と場に応じて、声かけ・助言をしていく。教職員のモチベーションを高め、認め励まし合える横のつながりを強化することが、人材育成（若手・ミドルリーダーの育成）につながる。

⑶　［こ］班

○提言発表Ⅰについて

・地域連携の推進役・啓発役として何のための地域連携なのか整理と管理が大切であり、全体計画の中で今までやってきたことを整理したり支援内容をまとめたりしながら、学校内外の体制整備を行っていく。

○提言発表Ⅱについて

・ＳＣ・ＳＳＷ・非常勤講師等様々な職務の職員が多くなっている。勤務の管理や連絡・調整、効果的な配置について検討していくことが大切である。

・多岐の地域人材（大学生等）の導入を工夫して学習活動を推進していく。

３　指導助言

２つの提言で共通していることは、教職員の組織の活かし方、外部との連携・情報発信を大切にする方法であった。イミテーションの繰り返しが優れたイノベーションになるので，参考となった事例をぜひ実践してみてほしい。

⑴　提言１について

３つのねらいを柱に５つの取組みが紹介されていた。全職員が教育目標を理解し意識するために、職員会議等全体の場だけでなく、行動規準表の作成や個別面談等を利用して、個人にも意識させるように教頭が助言していた。

保護者と地域の理解や協力を得る教頭の関わりについては、学校の教育活動について広報や学校公開、様々な会議などを通して積極的に働きかけていることが分かった。

保護者と地域との連携では、教頭が学校内外の要望の調整・受け皿つくりに努めていた。

地域連携教員については、地域と関わる目的、お互いの共有があってこそ効果が生まれる。そのために、教頭が共有のための連絡・調整などに尽力している。

⑵　提言２について

３つの視点から研究を進め、具体的な事例が多い。

教師を活躍させるために、専門性を大事にするだけでなく、眠っている才能を引出し意欲を高めるための校務分掌や校内研修の工夫があった。

配慮を必要とする児童やその担任へのフォロー体制が大変参考になった。

外部人材活用については，中学生の活用事例があり、小中一貫教育の上でも効果が期待される。また、夏休みの○○教室などにも教頭が企画・運営の中心として携わっていることが分かる。

地域との連携では、子どもの実態や育てたい子ども像を基本に適切な方法を考えたり、教頭が伝えること伝えないことを見極めたりしていってほしい。また、リーダー育成や保護者・地域との連携はますます必要になってくるので、教頭の思いを教職員に伝え、方向性を示していってほしい。

（記録：大嶋　景子・柿沼　明美）

第２Ａ・Ｂ分科会　子どもの発達に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立若松原中学校長　　髙田　芳紀　先生

子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方
－異校種間連携における教頭の果たす役割－

提言地区　芳賀地区　芳賀郡市小中学校教頭会

すべての児童生徒にとって魅力ある学校をめざして
－不登校未然防止に向けた教頭としての取り組み－

提言地区　塩谷地区　小中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　芳賀地区
芳賀郡市小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

「芳賀の教育」における学校経営の方向性の１つとして「異校種間の連携・交流の推進」が挙げられている。

そこで、「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を目指し、子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方を研究課題として、子どもの発達課題の達成を図る児童生徒指導の推進における教頭の果たす役割を追求すべく、本主題を設定した。

イ　研究の概要

地区内全小中学校の教頭を対象にしたアンケートの実施・分析から、計画的・継続的な連携事業の必要性や９年間の統一性のある指導の推進、また情報交換の不足等の課題を確認した。

３年間の研究を、目標の共有化・発達課題の明確化・問題意識の共有化・情報共有のシステム作りの４つの解決策に絞り、教頭の関わりを明確にして研究を進めることとした。

ウ　成果と今後の課題

アンケート調査により、教員の意識や取組状況、児童生徒の実態が明らかになった。研究の過程で明らかになった４つの解決策について、関連表を作成するなど改善を図っていくこととした。

一方、小中連携を先進的に実施している学校は、小中が隣接するなど連携に好条件の学校であった。他の学校でも活発な連携が図れるよう、教頭としての働きかけをさらに明確にしていく必要がある。

⑵　塩谷地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

現在、児童生徒指導上の重要課題の１つに不登校が挙げられる。一度不登校に陥ってしまうと、学校・学級への復帰が難しい現状が認められることから、不登校を未然に防止することが大切である。

そこで、最も効果的な方策は、魅力ある学校づくりであると捉え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

「学習指導の充実」「人間関係構築能力の育成」「小中、関係機関の連携の充実」の３つの視点から、研究のねらいや方針を共通理解し、具体策を検討・実践し、研究を進める。

授業形態や指導体制の工夫による学習指導の充実、生徒の主体性を育てる学校行事や生徒会活動の工夫、また小中の効果的な連携や適応教室との連携など、取り組みがさらに充実するよう教頭の関わりについて推進していく。

ウ　成果と今後の課題

授業形態や指導体制の工夫により、授業がわかりやすくなり生徒の学びが主体的になった。また、学校行事の充実が、達成感や高揚感を感じさせ、結束力の向上に効果的であった。

学習意欲が向上しない生徒に対し、学習の有用感や面白さを感じさせるような指導が有効ではないか。魅力ある学校づくりのための学校行事の充実は有効であるが、行事が立て込んでスケジュールが過密になり教職員の多忙感は増大している。また、地域人材活用など教職員の意識改革を推進する必要がある。

２　グループ協議内容

⑴　〔う班〕

○提言Ⅰについて

・小中一貫については、９年間を見据えた連携のあり方がポイントになる。
・異校種間の連携については教頭のサポートが大きなポイントになる。
・視点アとウが重複しているので、実施してみて見直しをしてみるとさらに効果が深まるのではないか。

○提言Ⅱについて

・学習については「わかって」初めて達成感が生まれる。教頭としての指導が必要である。
・わかる授業は不登校対策になる。
・学校行事について、計画的に実施できるよう教頭としてサポートしていくことが必要である。
・行事による多忙感を感じないように精選をしながら調整していくことが必要になる。

⑵　〔え班〕

○提言Ⅰについて

・クリーン活動、避難訓練、運動会、学力向上の一環「生活チェックシート」の作成と活用、教職員の交流等、効果的な連携活動を行っている。
・４つの視点について

ア目標の共有化については年度当初に共通理解を図ることが大切である。

イ発達課題の明確化では、９年間を見通した系統的な指導計画の作成が必要である。

ウ問題意識の共有化では授業参観や情報交換会を実施し共有化を図ること、先生方が仲良くなるために懇親会を開催することなどが必要である。

エ情報の共有化のシステム作りでは、小学校での対応の仕方、通級児童についての対応等について説明することが必要である。

○提言Ⅱについて

・わかる、できる授業のためには、ベテランの先生の授業参観をする。教頭はスムーズにできるよう適切な対応をする。

⑶　〔く班〕

○提言Ⅰについて

・教員の意識改革を図るには、教頭がリーダーシップをとって小中連携のシステムを作っていく必要がある。
・小中の教頭同士が話し合いをもって何のために取り組むかをはっきりさせていくことが重要である。

○提言Ⅱについて

・学校の中で、ミドルリーダーを育てる必要がある。
・学校の情報を得て校長に具申することが教頭の重要な役割である。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・小中連携については、全国的な取組がされている。
・中１ギャップへの対応については、小中学校の教員の乗り入れをする、６年生が中学校を訪問するなどが効果的である。その際、教務主任や教頭が対応することが望ましい。
・教頭は「こんなふうにやりたい、ここを改善したい」と　校長に具申をしてほしい。

⑵　提言Ⅱについて

・不登校について教育相談部会（スクールカウンセラー、特別支援コーディネーター等を入れる）を実施し、ストレスのたまっている子どもに息抜きをさせる。「かがやきルーム」の活用をはかる。別室登校や保健室登校など、学校に来させたいという担任の思い、担任の声かけが重要である。
・秋田県山王中学校の例…部活動が盛んで学力よりも生徒指導が重視されている。生徒指導と学習指導は車の両輪である。授業がわからない生徒が不登校になるのかもしれない。教え込むのではなく、子どもたちに考えさせることが大切である。間違えた場合は視点を変えて、考えさせてみるのもよい。

⑶　最後に

・校長が見えないところを教頭が気づき、具申をすることが大事である。
・校長と教頭がペアになって学校を経営してほしい。
・ミドルリーダーの育成を図り、学校経営の中核としてがんばってほしい。

（記録：櫻井由美子・廻谷　友子）

第３⑴分科会　施設・設備及び事務に関する課題（合同）
第３⑶分科会　ＰＴＡ及び地域社会に関する課題（合同）

助 言 者　宇都宮市立昭和小学校長　　大豆生田将　先生

学校施設・設備を活用するための環境づくり
－学習環境の整備に向けて－

提言地区　那須地区　大田原市大田原地区教頭会【Ｂ】

豊かな人間性をはぐくむ家庭・地域との活力ある連携をめざして
－特色ある学校づくりを支える家庭・地域とのかかわり－

提言地区　上都賀地区　中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　那須地区
大田原市大田原地区教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校施設は、児童の学習や生活の場であるが、地域の生涯学習の場として、また災害発生時には地域の防災拠点としてなどの役割があると「義務教育諸学校等施設の整備に関する施設整備基本方針」に　述べられている。これらの役割を踏まえた上で、学校施設設備を有効に活用するための環境づくりに、教頭としてどのように関与していけばよいかを考察していく。

イ　研究の概要

研究１年次として、各学校の施設・設備についての現状を把握するためのアンケートを実施し、課題や教頭としての関わりを考察する。

調査項目として、タブレットＰＣの活用、空き教室の活用、学校施設・設備の開放についてとした。

ウ　成果と今後の課題

・教育機器の使用を通して、教育効果を上げるため、教頭として指導法の研究を進めるとともに校内研修の充実を図ることや、市内外の学校との情報交換が大切である。
・空き教室を地域との連携を図る場として利用していくことや学校が持つ資産を可能な限り開放していくことは益々重要なことになっていくが、それに伴う管理面での課題も多い。

今後、これらの課題解決に向け研究を深め、より教育効果を高める施設設備の活用・環境づくりを考えていきたい。

⑵　上都賀地区
中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

教育基本法等の改正により、学校・家庭・地域社会がそれぞれ教育の場として十分な機能を発揮し、連携することが求められている。そこで、豊かな人間性をはぐくむために、学校は、家庭及び地域社会とどのように連携を深めていけば良いか、また、その際、教頭としてどのように関わっていくことが効果的かを考察するため、上記のサブテーマを設定した。

イ　研究の概要

研究を推進するために「地域の教育力を活用すること」「地域人材を活用すること」「学校支援ボランティアを立ち上げ、活用すること」という３つの視点を設定し、それらの視点に基づき、各学校の事例を調査し、分析・考察を行った。

ウ　成果と今後の課題

視点を明確にして連携を深めたことで、各校の取り組みは充実し、家庭や地域社会と信頼関係を深めることができた。確認できた教頭の関わりは、校内においては、担当者への支援・指導及び連絡調整を通して、動きやすい環境作りに努めること、外部との連携においては、連携の青写真をもつことである。明確な目標をもち、連携がどの程度実現されているのかを現状把握し、調整しながら進めることが、外部と連携する場合は大切である。

今後は、学校の規模や実情等に応じ、教頭と地域連携教員の役割を明確にした上で、教職員が組織的に取り組めるよう、校内体制をさらに整備したい。

２　グループ協議内容

⑴　協議の柱１について（教育機器の活用）

・これからの社会を考えた時、子どもたちに活用の力をつけていく環境作りを進めることは重要。しかし１つの側面であり、人とのかかわりを意識して取り組みたい。〔い班〕

・ＩＣＴ機器活用の課題として、機器使用に振り回されてしまう、教員の得手・不得手があるなどが見られる。効果的な活用のため、教頭として教員が使いやすいよう、市や業者への要望の窓口として思いを伝えたり、意図的計画的な研修を推進していくなどにかかわることが大切である。〔お班〕

⑵　協議の柱２について（施設の開放）

・学校施設の開放は市の管理で使用しているところと学校で管理しているところがある。教頭の負担は減りつつあるが、使用スケジュール、施設の破損等、連絡調整が必要である。〔え班〕

・空き教室の利用については、地域の実態に応じての工夫が見られている。書道教室に貸与、少人数指導にいかす、地域の人々の来校を目指し、学校の歴史を語る写真等を展示しミュージアム風に環境作りをする等々。〔え班〕

⑶　協議の柱３について（家庭や地域との連携）

・中学校では地域と関わる教育活動が少なくなりがちであるが、部活動単位で分担し、地域の行事に参加している地域もある。〔あ班〕

・連携する際、地域の方への周知が重要である。地域の方との顔合わせもあると良い。〔う班〕

・連携では、老人会や社会福祉協議会、もとＰＴＡ会長等を活用しているところもある。〔か班〕

⑷　協議の柱４について（連携への教頭の関わり）

・連携して行う教育活動が、さらに充実したものとなるようにアンケートをとることも重要である。教育活動の質への教頭の関わりも求められる。〔う班〕

・教頭は全体を見ながら校内体制を整え、適材適所で調整していく。〔き班〕

・教頭が地域連携教員を兼務していないケースでは、コーディネートを教頭が行い、具体的な部分を地域連携教員が行っていた。〔き班〕

・外部との関わりが一部の教職員に限られると地域とのつながりが弱くなるので、複数の教職員が関わる仕組みを作ることも大切である。〔く班〕

３　指導助言

⑴　はじめに

・「学校施設・設備を活用するための環境づくり」も「家庭・地域との活力ある連携」もこれからの学校教育に求められるところである。「その関わりを、どう具体化していけばよいのか」、那須地区も上都賀地区もその具体化について分かりやすく提言されていた。

・日本はアメリカ、イギリス等に比べ、教職員がいろいろな職種を担わなくてはならない。家庭や地域との連携は、教師が本来の業務に向かう環境を整えることにもつながっている。

・班別協議では各校の実情が違う中で有意義な情報交換ができていた。

⑵　那須地区の提言に関して

・タブレットＰＣをどのように活用すれば良いかまた、現時点の課題は何かを提言により確認できた。明らかになった活用法は、他校でも用いることができる。

・「空き教室の活用法」が小学校と中学校では違うことが明らかにされた。目的を明確にして、さらに有効に活用することが期待できる。

・アンケートにより「学校施設・設備の開放の現状と課題」が明らかになった。課題を改善して環境を整えていくことは、地域社会の中で子どもを育むことであり、すばらしい。

⑶　上都賀地区の提言に関して

・学校と家庭や地域とをつなぐ働きをするコーディネーターの存在は、教育力を高める上で欠かせないものである。提言では、そのコーディネーターをどのように育成していくのかが、「地域教育協議会」の立ち上げの過程から詳しくまとめられていた。コーディネーターを育成する際、大いに参考になる。

・各校の実情に応じた「教頭と地域連携教員の仕事の内容の整理」が示された。この提言を参考に教頭と地域連携教員の仕事を整理することができる。

（記録：屋代　敦子・見目　宗弘）

第４Ａ・Ｂ分科会　組織・運営に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　下野市立石橋北小学校長　　高木　　明　先生

学校運営の活性化を図るための組織・運営のあり方
－学力向上に向けての教頭の取組－

提言地区　上都賀地区　小学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　上都賀地区　小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校が家庭や地域と連携し、児童に「生きる力」を育む上で、中核となるのは日々の授業である。授業を中核に教育活動の質を高めていくためには、学校の組織的な働きが必要であり、学校組織マネジメントが重要である。教頭がどのように学校組織マネジメントに取り組めばよいのか、学力向上を視点にして組織・運営のあり方を考察していくことにした。

イ　研究の概要

学校組織マネジメントを生かしながら、学力を向上させていくために必要なことは何か、各学校の事例をもとに現状を分析し、課題を把握する。それらの課題を踏まえ、具体的に仮説を立てて検証していく。地区教頭会において、本研究について提案し、各学校の実態に即した実践及び評価を進め、組織・運営のあり方について考察していく。

ウ　成果と今後の課題

学校組織マネジメントを生かした教頭の役割について、「ビジョンの構築」「環境づくり」「人材育成」「外部折衝」の観点から確認ができた。

学校運営が更に活性化するために、全教職員の学校経営参画意識の高揚・課題解決に向けての目標の共有化・実態把握と分析の共通認識・見通しをもった計画と実践・外部との協働ネットワークの構築等の課題が見えてきた。全教職員の学校経営参画意識の高揚と組織の活性化を図るために、現状の把握と分析から仮説を設定し、今後３年間にわたってその検証に努めていきたいと考える。

危機管理体制の確立
－教職員の危機管理意識を高めるために－

提言地区　下都賀地区Ａブロック中学校教頭会

⑵　下都賀地区　Ａブロック中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校において生徒が安全安心な環境で学習活動に励むことができるようにすることは、公教育の実施において不可欠なものであり、学校安全のみならず教職員の不祥事等も含めて、危機管理を確実なものにしていくことが求められる。しかしながら、近年、様々な災害や事故が学校内外において発生し、生徒の安全の確保ならびに学校の危機管理体制の確立が喫緊の課題となっている。

イ　研究の概要

学校の危機管理体制を確立するため、多岐にわたる課題について、教頭としての関わりという観点から把握し整理する。今年度は、⑴災害安全に関する危機管理体制、⑵生徒に関する危機管理体制、⑶教職員に関する危機管理体制の３つの視点から、教職員の意識調査を行い、結果を考察した。

ウ　成果と今後の課題

上記の３つの視点からの意識調査の結果、自らマニュアルを作成したり、担当分掌をリード支援する「率先垂範」、経験の浅い教職員の生徒掌握力を高める研修実施などの「教職員の資質能力の向上」、実際に危機が起こりうるという意識を高める「危機管理意識の高揚」、チェック機能があり、報・連・相が当たり前にできる「組織力の向上」の４つのキーワードが、明らかになった。

次年度は、それぞれについての対策等を研究することになるが、焦点化して、より具体的、実証的に追究していきたい。

２　グループ協議内容

⑴　（あ班）

○第４Ａ分科会の提言について

・機能の円滑化を図るためには学力調査などの分析結果をもとに改善策が図られているかを的確に把握し指導助言することが大切。

・学習指導についての研修や出張報告などを行うことで情報の共有化を図り、学校が一体となった体制作りを行うことが必要である。

○第４Ｂ分科会の提言について

・研修の持ち方など小中間での違いを感じる。
指導部会による検討会や研修を設定する。

・地域性や地理的条件によって意識に違いがある。
地域ぐるみの取組を行っていく。

⑵　（お班）

○第４Ａ分科会の提言について

・学校支援ボランティアの取組について、一覧表を作成し、次年度以降に生かすことができるようにすることが大切。

・学校評価を行う際に、保護者のコメントを職員室に掲示して「見える化」「わかる化」を図ることができる。

○第４Ｂ分科会の提言について

・不審者侵入に対しての避難訓練を実施し、マニュアルの見直しを図っている。朝の時間を利用して全職員で危機管理マニュアルを確認している。

・警察と連携し、マニュアル通りにいかないことを想定したマニュアルの見直しをした。

⑶　（こ班）

○第４Ａ分科会の提言について

・学習状況調査の結果をもとに学業指導の充実を図る。明確なデータをもとに職員全員で振り返りを行うことが大切。

・授業研究会を通して適切な指導助言をし、管理職が授業改善・学力向上に向けての姿勢を示すことが大切。

○第４Ｂ分科会の提言について

・リスクマネジメント研修を行っている。職員会議の中で危機管理について話をする場を設定している。危機管理マニュアルについても研修を行っている。

・エピペンの使い方や嘔吐物の処理などを実際に行う体験型の研修を行っている。

・竜巻の避難訓練を実施したが難しかった。防災頭巾を児童全員に購入させた。

３　指導助言

⑴　はじめに

今、求められている組織とは、自律的な教職員による協働的な組織である。このような組織で個人に求められるものは、自分の役割を超えた自発的行動と、自律的な考え・判断・創意工夫である。このことを前提として、２つの提言についての考えを述べる。

⑵　上都賀地区の提言に関して

・学力向上に向けての教頭の取組として、次の４つがあげられる。

①　授業を通して学力の向上を図る。

②　教員がお互いに学び合う関係をつくる。

③　基礎を生かして考える力を育てる。

④　学力が遅れがちな子への支援。

・現状から見える課題に対して、学校経営の参画意識を高揚させていくことが求められる。

・教職員の発想を生かしながら、教頭がリーダーシップをとり、ＰＤＣＡサイクルを回していく。

⑶　下都賀地区の提言に関して

・危機管理意識を高めるポイントは、次の４つである。

①　危機的な状況・予兆を危機と認識できる目を育てる。

②　学級をオープンにして、複数の目で気になる子を観察する。

③　教育関係の事件・事故を週ごとにまとめ、周知したり、マニュアルを作成する。

④　チーム会議で対策を学ぶ。

・危機管理に関する研修・周知の仕方としては次の２つが有効である。

①　最も厳しい状況下で訓練を行う。

②　予兆や軽微な段階で、早期に対応する。
（ハインリッヒの法則）

・身近で最大の危機は、いじめ、不登校、学級崩壊である。いじめ防止基本方針に沿って、未然防止に努めることが一番の課題である。

（記録：八木　保光・橋本　敬子）

第５Ａ・Ｂ分科会　教職員の専門性に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立姿川中学校長　　片桐　　晃　先生

教職員の専門性の向上を図るための教頭のかかわり
－教職員の資質向上を目指して－

提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長会

教職員の資質向上を目指して
－学校の組織力を高めるミドルリーダーの育成－

提言地区　足利地区　足利市教頭会

１　提言趣旨

⑴　宇都宮・上三川地区
小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

学び続ける教員像の確立が求められている今日、教職員の専門性を高めることは子どもたちの生きる力を育む学校教育の具現化においても欠かせない。

そこで、教職員の資質・能力の向上のため、教頭としてどのように関わっていくべきか追究するため本主題を設定した。

イ　研究の概要

特別支援教育と危機管理に焦点を当て研究を行った。特別支援教育では「特別支援教育の推進への教頭の関わり」、危機管理では「教職員の危機管理意識の高揚と対応力の育成」の観点から、教職員の専門性を高めるため、教頭としてどのように関わっていけばよいか、各校での実践をもとに研究を行った。

ウ　成果と今後の課題

教頭として、計画立案や実践場面においてリーダーシップを発揮し、指導助言を適切に行い、実践後の振り返りや検証を促したことにより、特別支援教育が組織的に推進され、また、教職員の危機管理の意識が高まり、様々な災害に対応できる実践的指導力が身に付いてきた。

今後は、本研究の成果を継続・発展するために教頭として教職員のモチベーションを持続させるための働きかけの工夫が課題である。さらに、各校の実情に応じた様々な研修を実施し、更なる指導力の向上を目指していかなければならない。

⑵　足利地区
足利市教頭会

ア　主題設定の趣旨

今後の学校経営の中・長期的展望に立つとき、次世代を担う核づくり、すなわちミドルリーダーの育成が急務である。そこで、本研究では、各中学校でミドルリーダーを育成していくために、教職員を指導する立場にある教頭がどのように関わるべきかということについて、研究・実践することをねらいとし本主題を設定した。

イ　研究の概要

ミドルリーダーの役割や学校の現状と課題、これまでの取り組みを整理し、育成していくための場（視点）を意図的・継続的に設定した。その際、「人間関係（信頼関係）づくり」を基盤とした「教頭の４関与（知的関与・情的関与・働的関与・物的関与）」のあり方を検討・整理してきた。

ウ　成果と今後の課題

各校の実態に応じ、ミドルリーダー育成の場を意図的に設け、教頭の４関与を生かしながら日常的に取り組んできた。その積み重ねによって、ミドルリーダーとして期待されている職員は自分の役割を自覚するようになり、学校全体の動き等を掌握しようとする意識が少しずつ育ってきた。

しかし、年齢構成や多忙な学校業務等の課題の中、ミドルリーダー育成に意図的に関わる時間を生み出していく工夫をしていかなければならない。また、学校経営への参画意識を高め、資質・能力の向上に意欲が持てるような指導助言を心掛けていくことも今後の大切な課題である。

２　グループ協議内容

⑴　［え班］

○宇都宮・上三川地区の提言について

・特別支援教育の充実を図る上では、コーディネーターを中心に、学校全体で組織的に取り組むことが大切である。教頭として、コーディネーターの育成にも積極的に関わっていきたい。
・危機管理マニュアルの周知徹底が図れるよう、打ち合わせや避難訓練の際、説明や確認をこまめに行うことが必要である。

○足利地区の提言について

・ミドルリーダー育成のための具体的な実践例が多く示され、参考になった。
・主任クラスはミドルリーダーとしての自覚がみられるが、今後は副主任クラスにも意識付けを行う必要があろう。そのために、一ランク上の仕事を任せるなどして、資質・能力の向上を意図的に進めていかなければならない。

⑵　［お班］

○宇都宮・上三川地区の提言について

・特別支援学級の担任は専門的な研修を受けているが、通常学級においてはその知識が十分とは言えない担任もみられる。校内研修等を通して、資質・能力の向上を図っていく必要がある。
保護者への啓発や外部機関との連携も重要なので、教頭として積極的に関わっていきたい。
・避難訓練は児童生徒のためにやるという側面と教職員のためにやるという側面がある。学校の実情に合わせ、竜巻や動物など様々な場面を想定した訓練を行うことにより、実践的指導力を身に付けさせていきたい。

○足利地区の提言について

・ミドルリーダーの育成を目指し、教頭としての４関与（知的関与・情的関与・働的関与・物的関与）についての具体的な話が聞けて、たいへん参考になった。
・学年主任や校務分掌主任に重点課題の進捗状況をＰＤＣＡサイクルに沿って定期的に評価・報告させることで、資質・能力の向上につなげていきたい。

⑶　［か班］

○宇都宮・上三川地区の提言について

・特別支援教育を進める上で、役割をはっきり分担することが大切である。外部との交渉は教頭が行い、その他の業務はコーディネーターに任せることで、資質・能力の向上につなげていきたい。
・危機管理マニュアルが膨大になってきている。すべてを教頭が作成するのではなく、各係に分担することで、マニュアルが教職員により浸透するのではないか。さらに、教職員の資質・能力の向上にもつながるのではないか。

○足利地区の提言について

・年齢構成の偏りがみられるが、各校の実情に応じてミドルリーダーの育成を図っていかなければならない。
・教職員評価制度を活用し、勤務意欲の向上を図りつつ、教職員一人一人の特長を生かした人材育成を心掛けていかなければならない。

３　指導助言

⑴　はじめに

本分科会の研究テーマは、学校のあらゆる教育活動に結び付くものであり、学校力の向上にもつながるたいへん重要なものである。

⑵　特別支援教育に関して

特別支援教育のニーズが高まる中、本日の発表はたいへん参考となるものであった。校内研修の充実やコーディネーターの育成など、特別支援教育の推進のため、教頭が積極的に関わっていくことが重要である。

⑶　危機管理に関して

危機管理を確実に進めることは、たいへん重要である。危機管理マニュアルの作成やその周知徹底を行うことはもちろん、避難訓練等の実体験を通して教職員の危機管理意識の高揚や指導力の向上を図っていただきたい。

⑷　ミドルリーダーの育成に関して

教員の大量退職時代を迎え、次世代を担うミドルリーダーを育成することは喫緊の課題である。中堅教員を学校運営に参画させるなど、各校の実情に応じて意図的・計画的に人材育成を進めていただきたい。また、教頭として、校内研修の充実、風通しの良い職場（組織）づくり、教職員の意欲の向上などを意識し、次世代を担うリーダーの育成に取り組んでほしい。

（記録：荻野　雅之・堀場　幸伸）

第６Ａ・Ｂ分科会　副校長・教頭の職務に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　栃木市立大平南小学校長　　荒川　順光　先生

リーダーを育て、組織力を高めるための教頭の関与の在り方
－学校間の連携・協力を図る取組をとおして－

提言地区　南那須地区　南那須小中学校教頭会

小中連携における教頭の果たすべき役割
－更なる地域連携の視点を生かして－

提言地区　那須地区　那須町教頭会

１　提言趣旨

⑴　南那須地区
南那須小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校を取り巻く今日的な課題解決のためには、異校種間や地域との連携・協力の一層の推進が必要である。そこで、これまでの３年間の研究を踏まえ、高いコーディネート力をもったリーダーを中心とした学校間の連携・協力が課題の解決になると考え、そのための教頭の関与の在り方を研究するため、本主題を設定した。

イ　研究の概要

地区内２市町ともに推進している、幼稚園・保育園と小学校・中学校の連携事業において、高いコーディネート力をもった主務者同士が、連携・協力の中心となることでの効果及び教頭の関与の在り方について実践研究を行った。

具体的には、中学校区内での小中の交流会の在り方や、学力向上を図る共通課題の作成をとおして考察・検証を行った。

ウ　成果と今後の課題

・学年主任、教務主任、学習指導主任等、校内で重要な校務を担う主任に、教頭が連携の趣旨や目的・効果をより明確に示し、連携する場合の留意点などを的確に指示するなど積極的に関与することで、それぞれが持っているアイデアや相手の良さを引き出す考えが生まれ、工夫改善された連携事業を実施することができた。

・教頭としては今後、学力向上担当や特別支援教育コーディネーター、地域連携教員等より専門的に校務に携わる職員とも積極的に関与して、組織の充実を図ることが課題である。

⑵　那須地区
那須町教頭会

ア　主題設定の趣旨

「生きる力」の育成には、小中学校９年間を見通した計画的かつ段階的な取り組みが重要であり、小中連携教育は学校教育の大きな柱の１つになっている。そこで、小中連携に関する教頭職としての課題を把握し、課題解決のための取り組みをとおして教頭としての職務遂行力の向上に向けた研究を行うために本主題を設定した。

イ　研究の概要

今年度、新たに地域連携教員が指名された。そして、学校適正配置が推進され、学校支援協議会が設立される。今年度、新たに加わったことや昨年度までの研究の成果と課題を踏まえながら小中連携の取組実績について調査する。また、学校適正配置の実施及び予定に向けて、地域連携に関してどのように取り組んでいるのか調査することとした。

ウ　成果と今後の課題

・小中９年間を見通した連携によって、確実に中１ギャップの段差はなめらかになって来ている。教頭の関与として、小中連携の組織の連携・調整及び各校間の情報の共有・収集と校長への情報提供及び具申等が適切に行われてきた。

・地域連携に関して、教職員の意識の啓発のみならず、保護者・地域のへの啓発や人材の掘りおこしは、下地を作る上で最重要課題である。教頭としての関与の在り方を更に研究していかなけらばならない。

２　グループ協議内容

⑴　第６Ａ分科会の提言について

〔あ班〕どこまで教頭として関わっていいのか難しい。反面、教頭が関わらないと前進しない面もあるので、連絡調整が重要であると同時にリメイクや単純化の工夫が大切ではないか。

〔い班〕なぜ地域連携が必要か、目的や意義を教職員に研修などをとおして理解させる必要があるのではないか。また、異動してもスムーズに校務が運営されるよう役割分担を明確にしておくべきである。

〔う班〕学校規模の違いによって業務の内容が違う所がある。教頭と主務者との連携や、教頭と校長の連携をよくし円滑な学校運営を図っていきたい。

〔え班〕小中連携を推進させるためコミュニケーション力やコーディネート力が大切である。また、目的意識をもって現状を把握する力を職員みんながもっていることが大切である。

〔お班〕前年通りにならないようにＰＤＣＡのサイクルを今まで以上に意識して行うべきではないか。また、教頭は自ら外にでてコミュニケーションを図ることで地域連携に関わって行きたい。

⑵　第６Ｂ分科会の提言について

〔か班〕那須町の適正配置がスムーズに行われているのは、統合準備委員会を開いて細かく打合せをしてることもあるが、小中連携が円滑に行われているのが下地になっているからである。

〔き班〕小中連携に関して、教頭の関与性が不明確な面がある。解決策として、校長と教頭の合同部会、教頭と教務の合同部会を実施するのもよい。

〔く班〕教頭が中心になって、小中間の交流を活発にするための調整を行っていく。また、学校評価の情報を中学校区間で共有するのも良いのではないか。何より、教頭は笑顔力で人と人をつないでいきたい。

〔け班〕学校支援のコーディネーターを確保するのは中学校は大変難しい。小学校で見つけた人材を中学校にシフトしていくような連携が大切である。また、市町で差があるが市町と連携して人材の確保を図って行きたい。今は、先輩の後姿から学んでいく後輩は少ないので場面ごとに計画的に指導していくことが大切である。

３　指導助言

⑴　第６Ａ分科会の提言について

- 第９期までの積み上げに基づく発表で大変素晴らしい。
- 外部との対応は基本的に丁寧な対応を図るように心がける。外部や主務者とのコミュニケーション能力は地道に訓練していかないと身に付かないものである。例えば、電話や業者との対応なども教頭が職員に見本を示していくことが必要である。
- 他校との交流は、相手校の情報を職員が共有することが大切である。教頭は情報共有のお膳立てをしなけらばならない。
- トップダウンではなく、ボトムアップの研究実践が紹介されとても素晴らしい。この成果は前年度からの積み重ねが下地になっていると思える。
- 学力向上を図る共通課題の作成もなかなかできるものはない。学力向上の結果が楽しみである。

⑵　第６Ｂ分科会の提言について

- 統合は、地域の学校がなくなってしまう意識があるので大変である。那須町は、丁寧に統合問題に取り組んでいて素晴らしい。
- 少人数のクラスが多い現状を踏まえ、合同学習や合同の行事を計画し小学校間でも連携を図っている。今後は、中学校区間の交流を深めるため、各校の学校公開日にも進んで職員が参加できるように教頭として配慮して行って欲しい。
- 教職員の多忙感を減らすため、無駄なものは省いていく姿勢が大切である。また、充実感が多忙感を軽減してくれることから、職員への労いや成果の確認を忘れず行って欲しい。
- 那須町のように、行政を巻き込んで統合や地域連携を図っていくことは重要である。継続的に行政と連携推進していけるように組織を編成していくことがポイントである。

（記録：石田　　弘・佐藤　　寿）

「郷土の豊かな環境を学びにつなげて」

宇都宮市立白沢小学校　小　森　悦　子

本校は、明治６年に白沢宿明星院本堂を仮校舎として開校し、昨年創立140周年を迎えました。本校の学区には西鬼怒川の豊かな自然や昔の町並みを残している白沢宿などがあり、恵まれた自然・文化・歴史的環境の下、現在282名の児童が学んでいます。

さて、本校では、この恵まれた環境を教材化して、総合的な学習「くすのきプラン」の３つの視点「水・とき・いのち」に取り入れています。５年生は「水」をテーマとして、ＮＰＯ法人グラウンドワーク西鬼怒、アグリネット西下ケ橋、白楊高校、宇都宮大学などの協力を得ながら、谷川での生き物調査の体験を通して、現在の環境を守り育むための自分の役割を考える学習をしています。谷川は農業用水路ですが、湧水性の貴重な生物・植物が生育しており、この超一級の小川を守ろうとした人々の活動は栃木県道徳学習郷土資料の中にも取り上げられています。

また、３年生は、「とき」をテーマとして、奥州街道第１番目の宿であった白沢宿の歴史や文化、地域の産業について学びます。明星院、白髭神社、薬師堂、白沢地蔵堂などの文化財を守る人々、クレソン栽培農家の方と何回もかかわることによって、この文化を受け継ぎ、郷土に誇りをもって生きようとする気持ちを育んでいます。

これからも、この豊かな地域を愛し、維持してきた人々の願いや思いを未来につなぐために、自分の役割や生き方を考えることができる児童を育てていきたいと思います。

『陶器の町・益子焼き』の特性を生かした学校づくり

益子町立益子小学校　澤　村　哲　典

【ボランティアによる陶芸の指導】

益子小学校は陶器の町として有名な益子町の小高い丘（益子城跡付近）に建ち、本年で創立140周年を迎える伝統ある学校である。平成19年に旧大羽小学校と統合し、平成25年度に新校舎が完成し真新しい学舎で児童達は元気に活動している。

本校の周辺では、陶芸関係の他、商工業、観光などが発展してきた地域であることと史跡の多いところでもあることから、子どもたちの学習の場として環境の整った地域といえる。その地域の良さから、児童は小さい時から益子焼きに慣れ親しんで育ち、益子焼きは身近な存在である。

益子小には陶芸室があり自校で陶物が制作できる環境が整っている。これらを活用し、毎年全児童が１作品を制作している。１・２年生は親子行事として行い、３年生からは総合的な学習の時間に制作しているが、陶芸の指導のボランティアが数多くいることから毎年児童の傑作が生まれている。

また、益子町では教育課程特例校の指定を受けその拠点校として英語活動の授業に力を入れている。授業時数を増やし、３人のＡＬＴとともにほぼ毎週英語活動を実施し「国際理解活動推進事業」を進めている。

次に平成24年度から「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組み、近隣の小・中学校との交流を行い小小連携や小中連携の成果を上げている。

今後、さらに家庭・地域との連携を深め、地域の特性を生かした「郷土愛を育み地域に根ざした学校づくり」をめざして展開していきたいと考えています。

小規模教頭会だからこそ、連携を密に

南那須地区小中学校教頭会長　　齊　藤　和　久

南那須地区小中学校教頭会は、那須烏山市、那珂川町２市町の小学校９校、中学校５校、計14校の教頭で組織された県内一、小規模な地区教頭会です。

本地区教頭会では、昨年度までの３年間（第９期）、校内において教頭がコーディネート力を発揮し、教職員に関与することによる教職員の資質・能力の向上、校内体制の確立について研究を行ってきました。しかしながら、学校を取り巻く今日的課題に目を向けると、異校種間や地域との連携・協力の推進に取り組むことが重要になってきています。そこで、本年度からの３年間（第10期）は、今まで教頭が携わってきた「外部」とのコーディネート力を、各校における主務者（学習指導主任、児童指導主任や生徒指導主事、特別支援教育主任等）が身に付けるには、教頭がどのように関与していけばよいのかに主眼をおいて研究を進めています。本年度は、「リーダーを育て、組織力を高めるための教頭の関与の在り方　～学校間の連携・協力を図る取組をとおして～」を研究主題として掲げ、主務者が他校や地域との連携・協力の中心となって校務に携わることができるよう教頭の関与の在り方について研究を重ねています。

９月の全体研修会では、栃木県教育委員会事務局学校教育課学力向上推進室の先生をお招きし、「『とちぎっ子学習状況調査』からみる児童生徒一人一人の学力向上を図る方策」について、講話をいただきました。この中で、学力を向上させるためには、各校で授業改善や家庭学習の充実に取り組むことが重要であり、さらに、小・中学校９年間の学びの連続性を重視することが大切であることを再認識させられました。

これからも14名という小規模教頭会だからこそ、連携を密にし、本会の活動を更に充実させていきたいと思います。

研修と研鑽に励む教頭会に

佐野市小中学校教頭会長　　慶　野　靖　典

佐野市小中学校教頭会は、佐野市内の教頭38名（小学校27名、中学校11名）で組織されています。社会の信頼と期待に応えるよう研修と研鑽に励むとともに、会員相互の親睦を図ることを会の目的としています。

会には会長、副会長の他、研修・調査・表簿作成・厚生の４つの部会が組織され、それぞれの担当事項を分担して行っています。

全体研修会は、今年度は年間８回実施しました。内容としては、県教頭会研修課題の研究推進、研修課題と関連付けた講話、研究発表リハーサル、各種研修会参加報告、各部会からの連絡や協議、学校規模別グループでの情報交換等があります。

その中で今年度の講話は、６月に足利市立葉鹿小学校長の村山哲也先生から、「ＰＴＡ・読み聞かせボランティアと連携した学校図書館の改造」と題して、その取組についてお聞きしました。その中で、地域との連携が教師の負担軽減や、学校のイメージアップにもつながるなど、示唆に富んだお話が聞けました。

11月の県の研究大会では、佐野市小中学校教頭会は、「教育課程に関する課題」（小学校）で、研究主題を「地域連携の推進と教頭のかかわり」として、小中一貫教育推進のための取組や、地域連携教員との役割の明確化等に関する教頭としてのかかわりについての発表を行いました。

今後も、互いに切磋琢磨しながら、研修と研鑽に励むことができる教頭会でありたいと願いつつ、活動を続けていきたいと思います。

ひ　ろ　ば

南河内中学校歌

下野市立南河内中学校　間　中　理　恵

本校の校歌は、松田武夫作詞、古賀政男作曲である。歌詞には、「筑波嶺、鬼怒の流れ、白鳳、男体み山、夕顔の花、等」があり、南河内という地域の特徴を余すことなく載せてあり素晴らしい。「白鳳」とは、天武天皇の白鳳時代にこの土地に下野薬師寺が建立され、日本三戒壇の１つである戒壇が設置されたことを指す。また、聖武天皇の詔によりここから西の小金井に下野国分寺・国分尼寺が建立され、ここ下野市が古代東国地方の仏教文化の中心地として栄えたことは、もっともな地勢であると、歌詞からうかがえる。更に、この歌詞が表している山や川、そして広々とした田園風景はここ南河内中学校に立ってみるとよくわかる。３階の窓から眺める男体山と筑波山は美しい。

さて、校歌制定は昭和40年である。当時のＰＴＡ会長が校長と共に東京代々木上原の古賀先生宅にアポなしで校歌作曲を依頼に行き、引き受けていただいたとのことである。その情熱に頭が下がる。古賀先生作曲の曲は、ファンファーレのように歌い始める。そのファンファーレは、音の基音ともいえるＡ（440Hz）の音を並べており、中学生が襟を正して中学校生活をがんばろうという思いを応援するかのようである。

恵まれた地で熱い人の思いに支えられ、今日も本校の生徒達は生き生きと勉強や生徒会活動や部活動に励んでいる。

「校舎一体型小中一貫校・塩原小中学校」

那須塩原市立塩原小中学校　茂田井　令　子

本校は、本年４月、県内初となる施設一体型の小中一貫校として新たなスタートを切りました。本校の特色は「地域に根ざした生活科・総合的な学習の時間」の実践と、「９年間を見通したカリキュラムによる英語教育」を２つの柱として、日々実践を重ねています。地域学習では、湯の町「塩原」の観光案内ができる「観光ジュニアマイスター」を目指して、地域の方に指導をいただいています。英語教育では、英語が自然に身につくようにと朝・昼・帰りの放送が英語で行われていたり、小学１年生から英語活動を取り入れていたりします。

私は、初任の教頭として本年４月に赴任しました。当初は小学生と中学生が同じ校舎で生活し、昼休みに一緒に遊ぶ姿を見て不思議な感じを受けました。初めて経験することばかりで、ドキドキ、わくわくの毎日です。

児童生徒達は、入学式・体育祭・文化祭等様々な行事を地域・保護者に見守られながら、まさに一体となって行っています。９年生（中学３年生）が学校のリーダーとして活躍する姿はとても頼もしく見えます。

自然豊かな塩原に、そして県内初の校舎一体型一貫校に、どうぞ一度おいでください。明るく素直な児童生徒たちが、笑顔で“Hello!”“Nice to meet you!”と出迎え、塩原の良いところを紹介してくれるでしょう。

「親の優しさって…」

足利市立御厨小学校　阿　部　正　賢

朝、学校の外周道路の落ち葉掃きをしていると、低学年女児とその母親が一緒に歩いて登校してきた。２人ともなにやら楽しそうに語らいながらの登校である。深まる秋の景色や朝の空気を２人で味わっているかのようである。思わず、こちらもほほえみながら「おはようございます。」気分よく、落ち葉を掃き続けた。

数分後、乗用車が私の横をかなりのスピードで通り過ぎた。急いでるらしい。校門のそばで停車すると、児童が１人降り立った。すぐに、車は立ち去った。

本校は、児童数約860名の大規模校である。登下校時の車での送迎は、ケガ等の場合を除き児童の安全確保のため禁止としている。理由を書いたプリントも全保護者に今年度は２回配付した。しかし、車で送迎する保護者のなんと多いことか。子どもから、足腰を鍛え、四季の移ろいを感じる機会や友達との語らいの場面を自ら奪うこととなっている。

児童同士の関係に問題が生じたときも、わが子可愛さのため、暴走する保護者がいる。わが子のためと思いながら、実はわが子が困ってきゅうきゅうとしていることに気付きもせずに。親の優しさとは、子の目先ではなく、将来を見据えた、そして子どもの本当の気持ちを想像することから生まれるのではないか。最近、つくづく考えさせられる。

編集後記

東日本大震災をはじめ８月の広島土石流等、自然災害により想像を絶する甚大な被害を受けています。栃木県でも夏には竜巻注意情報が毎日のように発表され、各地で大きな被害も受けました。我が県には自然災害が起きないと思っていた会員の皆様も、自然の厳しさを知り、改めて日頃からの危機管理意識や防災対策が大切と痛感したのではないでしょうか。

さて、今回第40号を発行する運びとなりました。原稿の執筆等御協力くださいました方々に感謝申し上げますとともに、本会報が少しでも会員の皆様のお役に立てれば幸いです。（野尻）